

平成 28 年度 第 1 回三重県経営戦略会議概要

日 時：平成 28 年 7 月 26 日（火）15:30～17:40

場 所：フクラシア東京ステーションA会議室

出席者：加藤委員、白波瀬委員、津谷委員、西村委員、沼尾委員、
速水委員（座長）、松本委員、宮崎委員、鈴木知事

はじめに

鈴木知事：

- ・相模原市で起こった障がい者施設での痛ましい事件について、心よりご冥福をお祈り申し上げるとともに怒りを禁じ得ないものがある。県としても社会的に弱い立場にある方々が安全に暮らしていけるようにすることが大変重要と考えており、しっかりと配慮していきたい。
- ・昨日、外国人観光客が楽しめるような国立公園にするために重点的に取り組む環境省の「国立公園満喫プロジェクト」について、8つの国立公園の1つに伊勢志摩国立公園が選ばれた。東海、北陸、信越、近畿のエリアで選ばれたのは伊勢志摩国立公園だけであり、サミットで伊勢志摩の知名度が上がったことに加え、神宮や海女などの伝統文化と共生しているということも高い評価を得たポイントとなった。先人の文化を継続していただいたことに感謝をしながら、それに恥じない取組を展開していきたい。
- ・今年度から渡邊副知事や西城戦略企画部長など新たな体制で臨んでおり、引き続きよろしくお願ひしたい。
- ・サミットについては、無事故かつ大成功であった。委員の皆さんにもご協力、ご尽力を賜りあらためて感謝申し上げる。今日の会議では、これまでも議題となっていたが、サミット後に三重県がどうすべきかをご議論いただくとともに、県民とともにこのサミットをどう受け止めて、どう行動に移していくのかという宣言を出したいと考えているので、それに関連する議論もいただければと思っている。
- ・ポストサミットの取組では、9月に女性の活躍をテーマにした国際フォーラムを開催するほか、MICEの誘致や「みえ食旅パスポート」などの取組を具体的な事業として展開していく。最近のインバウンドの状況としては、平成27年度の外国人延べ宿泊者数が対前年伸び率で全国2位、サミット開催決定以降の下半期では1位になったほか、伊勢神宮の外国人参拝客数が6月に対前年比3割増しになったと聞いている。さらに、7月15日にはフランス料理店などを営む「ひらまつ」のホテル第1号が賢島にオープンするなど、色々な動きが出てきている。あくまでもサミットはチャンスでしかなく、このチャンスを生かして地域の活性化、三重県の活性化につなげていきたいので、今日もそのあたりを含めた議論をお願いする。

速水委員（座長）：

- ・今年度最初の経営戦略会議となるが、何度も申し上げているように、本会議は皆さんの専門的な知識、広い知見から三重県の県政に対してさまざまなご意見を出していただければという趣旨で設置されたものである。
- ・先ほど知事の挨拶にもあったように、5月の26、27日に行われた伊勢志摩サミットの結果を踏まえて、皆様からポストサミットに対しての大局的なご意見をいただければ、と思う。今日は出席者も多いので、なるべく端的なご意見を出していただき、議論ができればと思っている。

議題 ポストサミット～サミットの「レガシー」を三重の未来に～

西村委員：

- ・今回の伊勢志摩サミットは大成功だったと思う。海外にいても、「伊勢志摩」という言葉を聞く機会が多かった。あれだけ大きな難しい国際会議を三重県で事故無く開催できたということは、自信を持って良い。ジュニアサミットについても、開催前後で桑名市民の意識がガラッと変わった。それまで桑名を国際都市とは言わなかった人達が、ジュニアサミット後に、「自分は国際都市に住んでいる」と言い始めている。このように、市民の気分を盛り上げることは重要であり、今後も「何とかサミット」などを打ち出していけば、人を呼ぶ効果があるのではないか。ただ、その効果も2年も経てば薄れてしまう可能性がある。
- ・私が県と協力してさまざまな政策を策定する中で感じたことだが、三重県には、飛びぬけて素晴らしい技術を持った大企業はない。その代わりに、中小企業の強みや伝統技術を生かすため、イノベーションや社会改革の受け皿として、三重県を「試してもらおう場所」にするのが良いのではないか。
- ・先日、ハウステンボスを訪れたのだが、ロボット展を開催して集客するとともに、ロボットの社会実装を試すため、最先端のロボットを集めてロボットホテルやレストランの実験を行っている。ロボットの活用により、人手を減らして大幅なコストカットを図り、人手不足による制約を解消することも可能となる。新しい技術を社会に実装する際にはこうしたテストが必要である。
- ・三重県でも、「みえライフイノベーション総合特区」を実施したように、県で開発する力が無くても、社会で実用化するための「試す場」を提供してきた。現代では、一つの技術が大きく進歩して革新的に発展するというよりも、既にある技術や伝統が複数融合することによってイノベーションが起こる。今後も、イノベーションを試す場が必要とされる。三重県は、180万人の人口を抱え、産業構造のバランスが取れている。例えば、高齢化がものすごく進んでいる県南部で、自動運転や自立型エネルギーの社会実験を行う、といったことも考えられる。三重県が、日本全国からさまざまな技術を持ち寄って融合させるイノベーションハブとして、技術を社会に実装するための実験を行う場所となる、というのも良いのではないか。

津谷委員：

- ・伊勢志摩サミットの様子をテレビで拝見し、各国首脳が揃った姿を見て、涙が出そうになった。伊勢神宮と五十鈴川は清らかで清々しい雰囲気を出していて、今までのサミットの中で、最も良かったと思う。アメリカでも、ニュースなどで多く取り上げられていた。
- ・こうした効果を一過性のものにせず、どうつなげていくかが重要だ。三重県には、世界に比類ないブランドがたくさんある。特に、伊勢神宮と伊勢志摩国立公園の2つをカップリングさせて、ブランドの核として、広報を積極的に行うのが良いのではないか。ブランド化するからには、バックパックを背負った若い方が気軽に来られるような感じではないと考える。まずは欧米の観光客を呼び込む必要があるだろう。その上で、三重県の弱点は交通の便だと思う。例えば、広島には多くのアメリカ人が訪れるというが、それは新幹線で手軽に行けるということが大きいのではないか。三重県は、外国人に人気の高い京都や奈良から比較的近いので、交通の便が悪くても、何とか足を運んでもらえるよう、広報を強めていく必要がある。
- ・もう一つ、リピーターを増やすことも必要ではないか。例えば、台湾の人は日本が大好きで、日本は親切で安全で食べ物もおいしいという良いイメージを持ってきており、リピーターになりやすいということを聞いた。今はLCCが多く飛んでいるので、台湾をはじめとしたアジア地域のリピーターの観光客を増やしやすき環境にある。また、私の友人が、伊勢に1泊2日で訪れたが、時間が足りなかったのでは是非また行きたいと話していた。国内の旅行者でもリピーターを増やす余地があるのではないか。
- ・もともと三重県民は、恥ずかしがりな性格だと思うが、今回のサミットを機に、国際的な感覚が生まれたのではないか。この効果を一過性のものに終わらせてはいけない。今後、三重県では国体や菓子博の開催が控えているが、日本全体で考えると、最も国際的なイベントはやはり東京五輪だろう。まだ開催まで4年あるので、中長期的に広報を実施して、東京五輪に訪れる外国人観光客をターゲットにすると良い。
- ・そのほか、2015年の国勢調査が実施されたが、来年には都道府県別の世帯推計などが公表される予定である。現在、東京と沖縄を除いた都道府県で人口は減少している。先ほど西村委員が同じようなことをおっしゃったが、三重県の南部では超高齢化に直面せざるを得ないなど、今後、人口減少ペースの加速は避けられない状況だ。私は厚生労働省の「社会保障審議会人口部会」の部会長であるが、三重県の人口の将来のシナリオを描く際、県別将来人口推計は客観的エビデンスとして利用可能な資料となるので、何かお手伝いになることがあれば、お声掛けをいただきたい。

白波瀬委員：

- ・三重県のこの経験は2020年の東京五輪後に日本がどうしていくかということのモデルになるのではないかと期待している。

- ・この機会を使っていかに次につなげていくかが大事だが、内側、つまり県民の皆さんへも強いメッセージを伝えてほしい。ありがちなことだが、大成功すればするほど、取り残され感というのが出てくる。あまり外向きばかりではないという点を強調してほしい。
- ・今回、各国のトップが三重に来たが、それを目の当たりにすることができた若い人々がおおり、これをきっかけとして、アメリカ、ドイツ、フランスなどに行きたいという気持ちが芽生えているのではないか。この気持ちをいかに後押ししていけるかということで、大学や小中高校でグローバル教育をうまく展開できるような教育環境を整備してほしい。これだけの規模の国際会議ができたという自信があると思うので、そのノウハウを蓄積するとともに、積極的にそれを担ぐ人材を三重で作っていくことが重要だ。
- ・オバマ大統領がサミット後に広島を訪れたことで、平和と三重のサミットが一緒になったイメージがある。この平和と神宮の伝統、イノベーションあたりが今後、一つのキーワードになっていくのではないか。

加藤委員：

- ・資料の10ページの「共有すべき視点」やそれで何をするかという議論は大事だと思うが、こういう会議や県庁の中でこれ以上行っても、新しい考えが次々出てくるものではない。それよりむしろ、賑わいや発信力をどう持続していくかという「手法」が大事だ。
- ・菓子博や何とかサミットというイベントを否定するつもりは毛頭ないが、行政がイベントをやろうとすると、イベントをすること自体が目的化してしまう傾向がある。本来の賑わいだとかメッセージの発信とかではなく、イベントそのものが目的になってしまう。そうならないためには、なるべく多くの県民が参加できる仕組みを作るべき。
- ・私がやってきたことでうまくいった具体的な事例を紹介したい。昨年、地方創生の戦略作りが自治体で行われた。多くの自治体がコンサルに丸投げして、立派な冊子はできたが、ほとんど読まれていないのが実態だ。構想日本では、茨城県の行方市、千葉県の富津市、香川県の三木町という3つの自治体でこの戦略作りの手伝いをした。議論は無作為で選んだ住民を委員として行った。それぞれの自治体で約1,000人に無作為で葉書を送ったところ、だいたい5%、50人くらいの方が委員になってもいいという返事が来たので、この人達に議論をしてもらった。冊子自体はコンサルが作るものに比べると質素だが、会議自体は非常に盛り上がり、戦略作りが終わっても「まだやりたい」とか、「これまで、この半年間ほど自分の町のことを考えたことはなかったし、自分の町にこんなに良いものがあるということも知らなかった」という声が多かった。皆さんから面白かったという意見が出てきたことが良かったと思う。
- ・例えば「三重県のレガシーを考える100人委員会」などを作り、カテゴリー毎に高齢者や障がい者など色々な人に入ってもらって議論すると良いのではないかと思う。

- ・「何とかサミット」ではなく、県民が考える委員会を各地域でやると、色々なものが浸透するし、良いアイデアが出ると思う。

宮崎委員：

- ・地元でサミットに関わった観点から意見を述べたい。
- ・本来、商品というものはその裏にある物語性が大事だが、三重県はどちらかというと値引きで売ってきた。サミットで使われた商品は値引きなど関係なかった。いかに物語性が大事かということが良くわかったと思う。これは皆があまり意識していないのではないか。
- ・日本酒で言うと、行政が具体的に個々のブランドが出るような選び方をしたが、こういうことは今までなかった。「半蔵」^{はんぞう}「作」^{さく}「宮の雪」など具体的なブランドを行政がチョイスしたことは今までにないだろう。例えば、伊勢エビとかアワビとかはあるが、誰が養殖したというのはない。
- ・知事が中央公論に書かれた論文で、「目に見える日本文化は京都や奈良で寺社仏閣を見てもらえば良い、何も見えない日本の文化は三重県で感じて下さい」というのがあったが、これは素晴らしいと思う。
- ・今回は神宮が素晴らしい演出をしたと思う。神宮は宗教や教育上の理由から修学旅行の行き先として衰退したが、今回の伊勢志摩サミットで修学旅行を呼び戻す最高の物語性ができたのではないか。私は以前から神宮はパチカンだと言っている。宗教とか宗派は関係ない。修学旅行の行き先として今売らないといつ売るとかと思う。
- ・せっかく、ジュニアサミットを桑名市長島町で開催し、四日市市の「四日市公害と環境未来館」にも来てもらった。しかし、市にこの施設を修学旅行などの行先として売るつもりはない。
- ・桑名市に「石取祭」^{いしどりまつり}という日本で一番やかましい祭りがあるが、今回のジュニアサミットでは、これを桑名市長島町で行った。長島町は今でこそ市町村合併で桑名市内であるが、もともと桑名市と長島町は仲が良いとは言えなかった。それが今回、ジュニアサミットが開催されたおかげで、桑名の「石取祭」が初めて川を超えて長島町で行われた。これはすごいことだが、そういうことはあまり世の中に知られていない。もっと宣伝しても良いのではないか。
- ・物語性がいかに大事かということを我々も含めて産業人に知らしめないといけない。また、安売りを始めてしまっただけでは意味がない。
- ・今回のサミットで大きかったのは、三重県の食材をたくさん使っていただいたと同時に、三重県の人材をしっかりと使っていただいたことだ。一億総活躍社会の時代に相応しい「女性」と「若者」ということ言えば、志摩観光ホテルの女性シェフを代えなかったことがすごく良かった。リゾートホテルで国際会議に腕をふるった女性シェフはなかなかいない。今では取材攻勢が

すごく、タレントさんと対談したり、雑誌にもたくさん出ている。それから、相可高校の生徒が配偶者プログラムで、サービスだけではなくて料理を作ったというのもすごいことだ。

- ・ こういう演出が随所でうまく行われているが、上手に宣伝しないと、気が付かない人は気が付かない。三重県は本当にうまくやっていると思う。

松本委員：

- ・ 伊勢志摩サミットについて、何か事件などが起きないだろうかと心配していたが、完璧に行われたと思う。また、私の周囲では、伊勢志摩に関する会話が聞かれるようになり、国内でも認知度が上がったと感じる。
- ・ 今後の日本にとって、観光産業が大きな役割を持つと考えている。三重県では、伊勢志摩を中心とした強みをさらに伸ばすことが重要だ。そのためにも、JR東海と近鉄では、今後、よりタイアップしてより良い旅行商品を作ろうとしている。
- ・ 伊勢志摩地域には、環境を非常に大事にするという特徴がある。大台ヶ原から流れる水や、伊勢神宮に代表される環境適応、常若の精神など、これらだけでも世界に訴えかけるものがあるはずだ。
- ・ 観光客の増加によって、衰退してしまった産業が再生して雇用を生む、といったことが期待できる。また、先ほど宮崎委員が修学旅行についておっしゃったが、かつては全国から修学旅行で伊勢神宮を訪れていた。しかしその後激減し、その結果、大人になってからのリピーターも消えてしまった。今回のサミットで世界の首脳が伊勢神宮を訪れて発信したメッセージを、日本に位置づけるのに修学旅行は適している。これから伊勢への修学旅行を増やしていく好機になったと思う。

沼尾委員：

- ・ 若い世代が次々に移住している中山間地域を見て回っているが、そうした地域に共通している特徴は、その地域に縁もゆかりもなく、全く異なる価値観を持っている他者を受け入れる寛容さを持っているということだ。地域の暮らしには古くからの慣習やルールもあれば、水源や共有林などの共有財産もある。そのようなところによそ者が入ってくることは、ある意味地元の人達にとって脅威になりうると思うのだが、人口が減少している中で、よそ者を受け入れながら、一緒に地域を守り、新しく文化を作っていくにはどうすれば良いか考えていこうとする寛容さがあるかどうか、これから地域が開いていけるかどうか、その存続に関わってくると思う。
- ・ 開かれた地域という視点はローカルな地域においても大切だが、今回のサミットで神宮に大勢の海外の方が来て、ものすごく開かれた空気がテレビの画面から伝わってきたことをみても、開かれた歴史風土は伊勢志摩を含めた三重県における素晴らしい財産だと思う。そうしたところを、県としてどのようにさまざまな場面でこれから活かしていけるかがポイントになると思う。

- ・県の中で、他者や多様な価値観を受け入れられるような社会や暮らしをそれぞれの場面でどのように作っていくのか、あるいはそのための場や仕掛け、参加の仕組みをどのように整えていけるのか、ということがポイントになると思う。サミットの話を知ると、それぞれの地域の多様な技を持っている方や、世代、性別を問わずに参加できるきっかけを、それぞれのイベントで盛り込んだということであり、参加した人達は誇りに思っただろうし、サミットという共通の物語を持てたのだと思う。自分はこの役割ができると開いた後に、従前の「自分はいかにできない」という考え方にとらわれずに、さまざまな人が集まることで、新しい形の役割、アイデアなどが生まれる。こうした「場」をどのように展開していけるか、考えなければいけない。
- ・それは産業振興、観光、教育、福祉それぞれの場面で考えなければならないことだが、そのように縦割りにしておくことも良いのかさえわからない。例えば、農作業に障がい者の方が参加して可能性が開けていくということもあるだろう。従来の縦割りの施策が横に組み合わされて、新しい可能性や仕組みができてくることもあると思う。サミットを通じて知り合ったり、新しい展開が生まれたものが今後どのようにつながっていくか、ということ議論する「場」を用意することも大切ではないか。よそから入ってくる人達も参加することで新たなビジネスチャンスも生まれてくると思う。

鈴木知事：

- ・今日でサミット開催から60日という節目である。国政選挙や都知事選が終わると東京五輪まで情報空白期ができるので、そこを中心に物語などの情報をしっかり発信していきたい。
- ・洞爺湖サミットでは「北海道環境宣言」を出しており、北海道はサミットを機に環境問題に取り組んでいる。北海道の宣言はどちらかというと行政がこんなことをやるという意味合いが強かった。三重県では、県民に参加していただいて、県民の行動を促す宣言を残したいと考えている。今回さまざまな手法などをご議論いただいたので、仕掛けや仕組みについても県民に参加していただく方策をしっかりと考えていきたい。
- ・次世代の人材についての話があったが、一つサミットにまつわるエピソードを紹介したい。洞爺湖サミットの際に首脳の食事の手伝いをした小学生の女の子が、これをきっかけに地元のことが好きになり、高校を卒業して洞爺湖町役場に就職したそうだ。このように次世代の人達に、今や明日のことに対するきっかけがあるかわからないが、将来の選択において、サミットの経験が生きたということを残していくことを大切にしたい。
- ・神宮についての話があったが、サミットの際に、神宮に特に感銘を受けていたのはドイツのメルケル首相だ。メルケル首相は安倍総理に何度も神宮が良かったと話しており、特に「日本の強さの源泉を見た」ということを言っていたようだ。なぜ日本人がこのような精神性を持っていて強くて優しいのか、その源泉を見たということだったが、メルケル首相の言う強さを因数分解し

ていくと、寛容さや伝統、平和といったものが出てくると思う。そのように因数分解して考えることが大事だと感じた。

- 今回のサミットではいろんな方に活躍をしていただいたが、政府や私がこだわった中に、障がい者の方の活躍がある。配偶者プログラムのコーヒータムで出されたシフォンケーキは桑名の精神障がい者の方達が作ったものだが、今では注文が殺到していると聞く。人気を集めた理由には、障がい者の方が作っているという物語性もあるが、本当においしいからだ。良い物だから買おうという気持ちになっているのだと思う。また、障がい者の方の雇用が生まれるきっかけにもなった。あらゆる世代、分野の県民の皆さんの活躍があったので、今後、宣言を検討していく中でもそうした活躍の様子を思い浮かべながら作っていききたい。
- 修学旅行については、さらなる営業を実施し、しっかりやらないといけないと考えている。

速水委員（座長）：

- 今回のサミットは本当に大成功で、知事の努力が実を結んだと拝見していた。今回のサミットで尾鷲ヒノキなどの木を使うという知事のご発表があり、私自身もそれに基づいて全てのコーディネートをさせていただいた。今回のサミット開催地は伊勢志摩ということだが、私は東紀州、あえて言うなら奥熊野で林業をやっており、この地域のなるべく多くの人にサミットに参加してもらおうと、私のところから南の市町全部でやれるぐらいのつもりで仕事を分けた。仕事を進めながら思ったのは、皆さん仕事優先ということだ。皆さんに損をさせないように、お金をきっちり配分するという事に苦心したのだが、そこに誰も文句を言わない。この人達が東紀州に住んでいるのなら、この地域はまだまだ楽しみがあると思えるような仕事をさせてもらった。寛容さや職人気質ということも含めて、今の時代に合わないのかもしれないが、居心地のいい、仕事をやっていて安心感のある仕事をさせてもらった。ミスに対しても、考えられる可能性は全部潰して納入できたと思う。こんな楽な仕事はなかったというのが正直なところである。今回のサミットが自信を持ってもらえるチャンスとなったので、それを伸ばしたいと考えている。
- 伊勢志摩でサミットが開催されたので、ここが注目されるのは当たり前の話だが、熊野古道なども含めた南部に、いかに今後もじわじわとサミットの効果を使っていくかということが非常に大事だと考えている。伊勢神宮と三重県全体、伊勢神宮と熊野とのつながりという伊勢神宮から広がりを持った発想というものを、観光も含めてうまく利用していかなければならないだろう。サミットでの「ミス日本みどりの女神」参加に携わった際、伊勢神宮を案内していただく機会があったのだが、伊勢神宮に関係する寺社が周辺に多く広がっているということを知った。そういうものをどう利用しながら観光につなげていくかということが非常に大事だと感じた。是非それを使って、今回のサミットの効果を県内に広げていくということを考えないと、地元の

人達がサミットから外れてしまったという意識を持つことになるだろう。

津谷委員：

- ・先ほど宮崎委員が食材や人材についてお話しされたが、私の知っている食材に関してのエピソードを紹介すると、BBCの報道で見たのだが、国際メディアセンターで提供された地元の日本酒、松阪牛、海鮮に、欧米の記者が大変喜んだようだ。そこで私は、「食材と人材と環境材あふれる三重県」という三重県のキャッチフレーズを考えた。知事は、メルケル首相がサミットを非常に高く評価したとおっしゃったが、普段は仏頂面な彼女があれだけ笑顔だったのは、私も記憶にないほどだった。
- ・それから、サミットを契機に宣言を出すということだが、今回は、世界各地でテロが発生している状況なので、「平和と安全と共存」を宣言に含めるのが良いのではないか。三重県の特長である、他者を受け入れる寛容性にも合致していると思う。

宮崎委員：

- ・今、京都は中国や台湾など外国人が多く来て宿が取れないため、修学旅行はほとんど駄目になっている。
- ・京都のすぐそばに伊勢があるので、今は絶好のチャンスだと思う。放っておくと広島に持って行かれてしまうので、その前に三重県が取るべきだ。修学旅行だと2泊できるので、ジュニアサミットの北勢と、伊勢のある南勢にそれぞれ来てもらえば良い。
- ・ただ、修学旅行を迎えるファンダメンタルズが伊勢にまだきちんと残っているのかどうか心配だ。二見浦の旅館などはほとんど無くなっている。ハイエンドの外国人旅行者向けの宿泊施設が必要な一方で、修学旅行生向けの施設も必要になる。この両者を賄うだけのファンダメンタルズがあるかということをお心配している。

松本委員：

- ・修学旅行について、過去に多くの宿泊施設が消えてしまっており、現状では修学旅行対応ができる場所はないと思う。伊勢神宮を訪れた後、志摩市に泊まるなどのやり方は考えられるので、まずは伊勢を訪れるルートをどうにかして確保する努力が必要だ。そうすれば、リピーターも自然と増えていくだろう。

西村委員：

- ・修学旅行に関して、国内に限らず、台湾からの教育旅行などアジアを見越した取組を進めるのも良いのではないか。既に桑名市では、ポスト・ジュニアサミットの一環として、受け入れの検討を行っている。
- ・もう一点、松本委員の前で大変申し上げにくいのだが、関東の人は、伊勢と

名古屋、京都を結ぶ有効な交通手段である近鉄をほとんど知らない。国内向けに、近鉄の存在を広める必要があると感じる。

津谷委員：

- ・東京では、近鉄の切符がとても買いにくいので、何とかしていただけると良いと思う。

松本委員：

- ・JR東海と近鉄ではセット商品の販売などを行っているが、確かに東京で近鉄の切符を単独で買うのは難しいところがある。とは言うものの、近鉄の広報が頑張っているようで、品川駅構内などでは宣伝をよく見かける。

速水委員（座長）：

- ・サミットの写真がたくさんあると思うのだが、写真展をすぐに始めなければいけないと思う。私は家具を作らせていただいたので記録を残して、地元の小学校で30枚ぐらいのパネルを作って展示している。そこに町の人を集めてサミットのことを話そうと考えているのだが、それで初めてサミットとはどんなものだったのかに気付く。そういう意味では、伊勢志摩はともかく、他の場所に関しては、地域の人達に対してサミットの熱が冷めないうちに県がきっかけを作っていけないといけない。行政で一番いけないことは取組が遅いことなのだが、早くやらないとさまざまな発想や意識付けというものが止まってしまう。

加藤委員：

- ・県庁の職員やここにいる人々はサミットに参画していたので、まだテンションは高い状態だ。ところが、「サミットと言っても我々にはあまり関係がなかった」という人が多いのも事実だ。そういう人にレガシーと言ってもあまり関心がないだろう。そういう人達に、今から少しでも関わってもらったり、テンションを上げてもらうような材料があれば、それらを早く使ってその他大勢の人のテンションを底上げすることが大事かもしれない。

白波瀬委員：

- ・サミットによって出てきたものや、印象というのは実はとても限られているということを自覚しなければならないと思う。皆を巻き込むきっかけづくりが大事で、実際にサミットでパイが膨らんだところがあったのであれば、その中に入ってもらう。しかし、実はどこが膨らんだのかがわからないということがあるので、できるだけ色々なところのソースから情報を集める努力はした方が良い。

宮崎委員：

- ・名古屋に「KITTE名古屋」という大きな商業施設ができて、その中に三重県の食材と三重県のお酒を出す「三重人^{みえじん}」が入った。サミットの後は圧倒的に流行っており、お店の人も最高の時にオープンできてラッキーだったと言っている。よそから来た人には、サミットの三重県のものがここにあるということで大変喜んでもらえている。我々は業者なのでこういう情報も入ってくるが、一般の人には知られていない。
- ・三重県の産業人には、サミットで何か良いことがあったかと聞くと、「何も良いことはなかった」という人が結構いる。私から言えば、それは努力をしていないからだ。例えば、来年、菓子博があるが、当社は酒屋で、お菓子とは真逆の立ち位置になるが、どうやって関わろうかと日々考えている。酒蒸しの饅頭屋さんなどにお酒を売り込もうとか、懐石の際には後できちんとお酒が出るとか、そういうことで関わろうとしている。何もしないで、何も良いことがなかったという人は、結局、何をやっても駄目だと思う。
- ・ネガティブな話になるが、業界ではねたみひがみもすごい。萬古焼で某先生が作った杯があったが、同じ業界でも他の人は「あれはあの人が作ったもので我々には関係ない」と言う。お酒でも選ばれたところは良いが、選ばれなかったところは、「あんなのは全ての酒蔵をミックスして樽で鏡開きしてもらった方が良かった」と言う人もいる。そういう発想の人を変えていくのは相当大変であって、何も良いことがなかったと言っている人の意見をあまり聞く必要はない。一生懸命やった人が報われない。

西村委員：

- ・サミットとは直接関係なく、最近、県内の市町で住民と話をしていると、三重県が変わってきたと感じる。大企業を辞めて地域に住み着く若者や、稼げる農業者や漁業者など、次の時代を読んで活動する人が三重県に増えてきて、それがたまたま、サミットや地方創生の盛り上がるタイミングに重なったような気がする。改めて三重県内を見直してみて、鈴木知事の1期目から行ってきた施策の芽生えなどを、どのように伸ばしていくかが重要である。具体的な事例をお話しすると、日本一やかましいとされる「石取祭」をインバウンド増加にどう活かすか、桑名市が旅行会社と検討している。
- ・地域の中で、自ら行動している人達かどうかを見極めて、あまり良くない言い方かもしれないが、取捨選択した上で、三重県が後押しすることで、そうした人達は伸びていくのではないか。

加藤委員：

- ・最近、すごく注目されている徳島県の神山町には神山塾という職業訓練所がある。空き家がいっぱいあるので、そういうところが宿舎として使われる。その中で東京から来た若い女性が言っていたという話が印象に残っている。

東京では、仕事が終わると、「今日は何を食べに行こうか、パスタにしようか和食にしようか」というようなことを話すが、神山町では宿舎に帰ると近所の方が山のように野菜を置いてくれている。「今日はこれを使って何を作ろうか」ということを考えると、すごくクリエイティブになる」そうだ。東京から来た若い女性の口からクリエイティブという言葉がぱっとでてくるということがすごく大事なことだと思う。

- ・先程、津谷委員がおっしゃった、「人材、食材、環境材」と言うことで言えば、東京には「材」を加工したものは山ほどある。また、加工するプロのクリエイターはいっぱいいる。三重県は極端に言えば、加工されたものは東京に比べると少ないが加工する前の「材」は山ほどあり、一部のプロのクリエイターではなくて、皆がクリエイティブになれる場所だということだ。
- ・若い子は自分がクリエイターになろうと思って来るわけではないが、「何もない」生活をすることによって、ある種のクリエイティビティを発見して、面白いと思うのではないか。
- ・私は正直言って「食材」という言葉は好きではない。外国人に「日本ではなぜ、食材という言葉を使うのか、あれは野菜であり、肉なのであって、日本人はあれを単なる材料と思っているのか」ということをよく言われる。都会に提供するための材料というのではなく、生の良い素材はたくさんあるので、是非、来て一緒にクリエイティブになろうというアピールができれば良いと思う。

西村委員：

- ・私も「材」という言葉を使わず、「地域資源」という言い方をしている。人も食も全て「地域資源」で、それを地域でどのように活用するかが重要だと考えている。
- ・こうした考え方に基づいて、南伊勢町に逆アンテナショップを作ろうとしている。町内に作った屋台村へ、名古屋のフランチャイズ店などを週末だけ呼んで、地域の食材を利用したメニューを作り、自らの店舗でも活用してもらおう。その代わりに、町が宣伝を行って、屋台には人を多く集める。このように、県外からやって来た人や企業に試してもらおう場として、三重県の果たす役割があるのではないか。

松本委員：

- ・三重県や県民が努力した結果、サミットは安全に開催されて、成功したと思う。こうした県民の努力や、首脳の神宮訪問が実現した裏側について、各国首脳の発言など第三者による評価を加えて発信することが、県民の自信につながるのではないか。

速水委員（座長）：

- ・サミットよもやま話を集めて語り続ければ、PRの核になるという感じがする。

沼尾委員：

- ・試す場という話に関連して、それぞれの地域で様々なものを作り上げる多様な「場」が大事だと思うのだが、それをどう政策に落とし込むかを考えた時に、うまく人と人とをつないだり、話し合いの場を仕掛けたり声を掛けたりするファシリテーターが大事である。つまり、そういう人達をそれぞれの地域で育てる、あるいは行政の職員が分野を越えてどういう「人財」がいるか目配りしながら、そこをつないでいく場を作るということを考える必要がある。また、その戦略を政策に落とし込んで、どう予算化するかというところも考えていただきたい。

加藤委員：

- ・地域の人達で作る委員会について言えば、最初は速水座長のような練達のコーディネーターが必要かもしれない。そして、そこに例えばこの委員の方が1人か2人程度入って、ちょっと違う意見を言ってもらおう。例えば山のようにあるサミットの写真から、こういうものを使うというのを、1、2回程度は勉強した上で、皆で議論をしてみる。そうすると、本当に面白い意見がいっぱい出てくるだろう。田舎の町に行くと、そこのよく知らない大学の先生だとか、商工会議所の人だとかが話をするが、正直なところつまらない。町の普通の人が一生涯懸命やっているうちに色々な意見が出てくる。そうすると、その中から、コーディネーターやファシリテーターをできる人が必ず出てくる。西村委員に続くような人を10人、20人作ることができるのではないかと私は思っている。

白波瀬委員：

- ・伊勢志摩サミットの記録はすごく重要だと思うが、記録やドキュメンタリーの企画はあるのか。今後のために重要だと思う。

事務局：

- ・記録誌は作る予定をしている。できれば映像も含めて作りたい。また、裏の記録誌も作りたいと思っている。

速水委員（座長）：

- ・海外の方が遊びに来られた際に、「サミット」と言っても通じなかった。海外の方には「G7」と言わないと通じない。逆に国内の人には「G7」と言ってもわからない。海外に発信するときはG7、国内に発信するときはサミット、そのあたりの使い分けは絶対に必要だと思う。

鈴木知事：

- ・今回のサミットは摘発者も逮捕者もゼロの初めてのサミットとなった。また、サイバーテロという新たな脅威も防ぎきることができた。今回の安全の裏側にあるのは、県民の協力である。地域の正常な状態を一番良く知っているのは住民の方だという考えのもと、テロ対策パートナーシップというものに取り組み、県民の協力のもと警備体制を組んだほか、警察、海上保安庁、県サミット推進局が一緒となって住民懇話会を何回も行った。首脳の移動のため交通規制を行った際には、周知を徹底するなか、県民の協力で大きな混乱もなく乗り切ることができた。県民全員が経済効果を受けられなかったかもしれないが、県民全員で安全を作り出したということは非常に大きい。今、犯罪から守るアクションプログラムを作っていて、これは県民全員で今回の安全というレガシーを次に引き継いでいくものになる。安全という分野でも、県民が参画する仕組みということをやっていきたいと考えている。
- ・ファンダメンタルズの話については、三重県の旅館は部屋数はあるが、稼働率が低く、対応できる規模などについては精査が必要だろう。今回、観光ファンドを作ろうと考えていて、これは劣後ローンを活用して、インバウンド対応など宿泊施設を充実、改善させるための資金を支援するものだ。中小規模の旅館は既に借金があり、新たな投資のためのお金が借りられない状況にある。そこで、劣後ローンを担保にしながらファンドでお金を出し、中小規模の宿泊施設もトライできるような仕組みを考えている。そういうもので、ファンダメンタルズの充実を図っていききたい。
- ・クリエイティブの話については、トマトを作りたいということで、愛知県の大府市から紀北町に移住してきた20代の方がいるのだが、彼が作った200%濃縮トマトジュースをメディアで出したところ相当の人気があった。大府市という人口の増加している街から紀北町に来て、農業を始めて、クリエイティブに作ったジュースがサミットというヒノキ舞台に出たというストーリーで、こうしたストーリーや記録をさまざまな場面で発信していきたい。

以上